近世以前の本願寺造営史〔研究発表〕

安藤　弥

はじめに

本稿では、近世以前の本願寺造営史について、大谷・山科・大坂（石山）の各時代を概括し、その歴史的展開を踏まえて、特に天満時代の造営をめぐる諸問題について検討する。本稿の前提となる特殊な状況として、筆者は「真宗本廟（東本願寺）造営史」編纂に関わることになっており、その意味あいについて、まず確認しておきたい。

平成二十三年（二〇一一）親鸞七百五十回忌法要を前に、さまざまな歴史的検証がなされるべきであり、その取り組みの一つに「真宗本廟（東本願寺）造営史」研究がある。[1] その研究の目標を筆者なりの受けとめでまとめてみれば、真宗本廟を〝信仰の場〟（よりどころ）として、浄土真宗・親鸞の教えを聞き、受け継いできた人びとのながき歴史的営みを明らかにすることにある、と思う。そこでは、本山寺院の権威を語ることが目的にはならず、また寺院・教団という歴史的構成体をもって教えを伝統してきたという現実的歴史を、原理主義的かたくなさで否定

することにもならない。浄土真宗の現在を知る上で、歴史的視点を持つことは必要不可欠なことであり、その意味で、本願寺という歴史的な場をめぐり、繰り返された造営の実態と、その造営に関わった人びとの歴史的なすがたを明らかにすることはたいへん重要な作業と考える。

ただし、同時に注意すべきは、どれだけ努力してみても、問題設定自体が、別の視点からすれば一宗派史・一寺院史という（閉ざされていると最初から決め付けられてしまう）枠組みでしか見られないというジレンマの存在である。また、近世以前の本願寺、すなわち親鸞死後以来の中世本願寺の歴史については実に膨大な研究史[2]があり、本稿の通史的概括が現段階でどれだけ新しい意味を持ちうるかという難題もある。そこで寺社「造営史」という視点の意義を積極的に押さえることにより、状況の打開を意図したい。

寺社造営史研究の意義は、当然のごとく単に一寺社史にとどまるものではなく、〝信仰の場〟を造営する人びとの精神的意義、造営をめぐる人びとの信仰史・教団（組織）史、技術史（建築史）・産業史、社会経済史、あるいは社会・文化や政治権力との関係史など、実にさまざまな分野の歴史的課題が複合的に論じられるところにある。

そこから本願寺造営史に絞っていけば、繰り返される堂舎造営のなかで、本願寺の歴代や教団を構成する僧侶・門徒集団がどのような意識で造営活動に関わり、実際にどのような活動をしたか。また、造営の実際においては建築をめぐる専門的な技術が必要であり、そこで関与する大工等の職人集団がどのような実態を有し、どのような技術を展開し、またどのような意識で造営に関与したか。さらに、造営に関わる諸経費の工面など教団内外における経済的実態の解明も重要であるし、同時代の政治権力が、その造営にどのように関係（認知・規制）したか、同時

代の人びとがどう見たかといった課題にいたるまで、実にさまざまな問題が想起される。

このような視点から本願寺の歴史を議論すること自体は、それほど研究史的に多いことではなく、その意味で、新たな議論の提示も不可能ではないと思われる。実際に今のところ真宗史研究と建築史的研究[3]の相互議論すら不十分な段階であり、本稿でその議論の進展に何らかの寄与ができれば幸いである。

一、　中世本願寺の造営史―大谷・山科・大坂（石山）―

中世本願寺の歴史的展開は、所在地の変遷をおさえれば、京都東山大谷→（越前国吉崎→）山城国山科→摂津国大坂（石山）→（紀伊国鷺森→和泉国貝塚→）摂津国天満（中島）となり、天正十九年（一五九一）、京都六条に移転（西本願寺現在地）、慶長七年（一六〇二）から九年にかけて、東本願寺が分立するという流れである。

このうち、吉崎は本願寺所在地ではないが、大谷本願寺を破却された後、蓮如が近江からさらに北陸に逃れて後に逗留し、拠点とした場所として真宗史上、著名なので参考までに記した。吉崎を本願寺としないのは、蓮如自身が御影堂に安置すべき親鸞影像（木像）を近江国大津に残して北陸へと旅立ったのであり、吉崎には御影堂・阿弥陀堂が建立されたわけではないことが主な理由となる。ここで本願寺たる条件として、親鸞影像を安置する御影堂と、阿弥陀堂（本堂）という両堂の建立が挙げられる。

この条件からすれば、鷺森も貝塚も、親鸞真影は安置されるものの、両堂が建立されなかったとみられることか

ら、本願寺とは言い得ない。しかし、真影を奉じた教団の中枢が一時的であれ拠点としたことから、本願寺の歴史を説明する際には、やはり外せない地である。本願寺住職ら教団の中枢が存在すること、あるいは吉崎にせよ、鷺森・貝塚にせよ、祖師親鸞の恩徳に対する報謝の儀式として教団の中心法要に位置付けられた「報恩講」が執行されていることなどの歴史的条件も考えあわせていくならば、それらもまた本願寺と位置付けていくという別の説明も成り立つであろう。しかし、本稿ではひとまず両堂の存在を本願寺たる基本的条件と考え、中世本願寺の造営史を大谷・山科・大坂・天満のみにしぼって検討する。また、造営の全体像から言えば、諸殿舎の建設や寺内町の形成なども重要な検討対象であるが、本稿では基本的に両堂造営を主な検討対象に据える。

（一）大谷本願寺

まず、本願寺の濫觴となる大谷時代から確認していきたい。弘長二年（一二六二）十一月二十八日に親鸞が死去し、東山大谷に墳墓が建てられたが、十年後の文永九年（一二七二）冬には、吉水北辺に墓を移し、堂を建てて影像を安置することになった。これが、後に本願寺となる、大谷廟堂の成立である。親鸞の曾孫覚如が撰述した親鸞の一代記『親鸞伝絵』[4]には「東山西麓鳥部野北、大谷の墳墓をあらためて、同麓より猶西、吉水の北辺に遺骨を掘渡て、仏閣をたて影像を安す」と記されている。

最初の堂舎（仏閣）は、『親鸞伝絵』の絵相によれば、小さな六角堂であり、その前に拝殿があったとみられる。その建築過程を知る手がかりはないが、堂内に安置される親鸞真影は、後の応長元年（一三一一）十一月二十八日

付「青蓮院下知状案」[5]に「彼影像者、為門弟顕智等之造立」とあることから、親鸞の門弟であった下野国高田の顕智らによる造立とみられる。また、土地の所有者は小野宮禅念、すなわち親鸞末娘覚信尼の配偶者であり、当地は文永十一年（一二七四）には禅念から覚信尼に譲られ、さらに覚信尼が親鸞門弟中に寄進したのである。

ここから、大谷廟堂の創立が覚信尼と親鸞門弟らによるものであり、親鸞の墓所＝廟堂が門弟の共有物という性格を有したということはよく知られている。造営史の視点から重要な問題としては、覚信尼の「本願主」としての性格が指摘される。[6]前出「青蓮院下知状案」にも「守本願主覚信素意、全影堂、可興行念仏之由、被仰下了」とあり、念仏興行を本願とした覚信尼の意志が、廟堂の成立・維持の拠るべきところとなっていることが読み取れる。

さて、京都東山に成立した大谷本願寺の歴史としては、都合三回の堂舎破壊がある。一回目は、覚如と異父弟唯善が大谷廟堂の管領権を争った、いわゆる「唯善事件」においてである。延慶二年（一三〇九）青蓮院の裁断により敗北が決定した唯善は、堂舎を破壊して影像と遺骨を奪い、関東に逃走したという。その後、青蓮院より覚如に復旧指令が出され、堂舎が再興される。前出「青蓮院下知状」によれば、堂舎庵室の造営には法智（関東安積に拠点）以下の門弟に功があった。また『存覚一期記』[7]によれば正和元年（一三一二）には、やはり法智の発起により「専修寺」額を掲げたという。この「専修寺」額は比叡山の圧力により下ろされるが、その代わりに「本願寺」が採用されたものとみられている。今のところ「本願寺」寺号の史料上の初見は元亨元年（一三二一）二月である。[8]紆余曲折を経て廟堂留守職に就いた覚如であったが、「唯善事件」からの復興は、明確に廟堂の寺院化という方向性をもって進めたものであった。

二回目は、建武三年（延元元年・一三三六）、南北朝戦乱による堂舎焼失である。[9] 暦応元年（延元三年・一三三八）十一月、高田専空・和田寂静らにより、建物（「今御堂」）を他から三十六貫で購入して移築し、堂舎再興を果たす。[10] これにより、当初の六角堂から変更して方型堂舎になることとなった。なお、このとき覚如は阿弥陀像の安置も企図したが、それは高田専空らの反対により成しえなかったという。とはいえ、次第に門弟懇志による廟堂の運営から、祈祷所・勅願寺たる寺院へと性格変化していく方向性が明らかに見える。

ところで、大谷本願寺が両堂形式を整えた時期は明らかではなく、覚如の孫で留守職を継いだ善如期説と、蓮如の前代（父親）である存如期説がある。善如期説の根拠は同時期の成立と推定される『源誓上人絵伝』[11] に大谷本願寺とみられる堂舎が両堂形式で描かれていることである。存如期説の根拠は、永享十年（一四三八）と推定されている本願寺存如書状[12] に「作事は坊計半作に候へとも、先々取立て候、御堂之事は近日候之間、御影堂の柱計可立用意にて候」とあり、御堂と御影堂の存在を示唆することである。ただし、両説ともに留意すべき点があり、決定打はない。

いずれにせよ、存如期には成立していたであろう大谷本願寺の両堂の規模は、後の史料であるが、『本願寺作法之次第』第三一条[13] に「大谷殿は本堂（阿弥陀堂）三間四面、御影堂は五間四面也、ちいさく御入候つる事に候」とある。一間を約一・八～一・九mとれば、後世の堂舎に比べると相当に小さかったことがわかる。ここから、初期の本願寺とその造営を支えた集団、すなわち初期真宗諸門流の社会的規模の実際もうかがい知ることができよう。

三回目の堂舎破壊は真宗史上、著名ないわゆる「寛正の法難」である。すなわち、寛正六年（一四六五）、比叡

山衆徒による破却で大谷本願寺は消滅することになった。ときの住職は蓮如五十一歳。蓮如はその後、近江から北陸へと移り、吉崎御坊を構えて多くの事績を残すが、この吉崎御坊は本願寺ではない。親鸞影像は近江国大津の三井寺（園城寺）に預けられ、また吉崎に両堂が建設された痕跡は皆無である。ただし、吉崎の参道には多屋が建設され、後の寺内町の原型をうかがわせることは造営史的にも注目される。

（二）山科本願寺

文明十年（一四七八）正月、六十三歳の蓮如は、河内国出口より山城国山科郷野村西中路に入り、「柴の庵」に住んで、当地に本願寺造営を開始した。野村の地はいわゆる『満済置文』[14]にも記録されているように、醍醐寺三宝院の所領であった。在地には海老名五郎左衛門（法名浄乗）という人物がおり、この海老名が寺地を寄進したという。そのほか山科選地の理由としては「京都本願寺」という意識があったとも指摘されている[15]。

山科本願寺造営の経過に関しては、蓮如の御文に詳しく記されている[16]。まず、山科郷野村という地は「往古より無双の勝境」であり、「山ふかく地しつかにして更にわつらはしき事なく、里とをく道さかりて、かまひすしきなし」によって一宇の坊舎を建立したという（一三一…番号は『真宗史料集成』第二巻「諸文集」。以下同）。未開発の地を切り開いて造営したことを示唆し、吉崎や大坂にも通じる立地的特徴である。

蓮如が山科に居を構えてほどなく新たに馬屋を造作するのみでその年は過ぎ、翌年正月十六日から「春あそひ」として林の中にあるよい木立の松を掘って庭に植え、また「地形の高下を引なほし」ている。土木作業の開始であ

り、実態は不明ながら、それを担う技術集団の存在することが確実である。三月初旬には向所（綱所）を新造し、その後も造作は続いたが、四月初旬に摂津国堺御坊の古御堂を移築して寝殿を造り、四月二十八日には柱立が始まり八月ごろには寝殿と庭園が形を整えている（一一四）。

十月に、蓮如が自身の存命のうちに御影堂を造営したいと思い企てるところに、その志を知った河内門徒が大和国吉野の山奥に杣入りして、十二月中旬には柱五十本余をはじめとする材木を山科に上げた（一一七）。

さて、文明十二年（一四八〇）が御影堂造営の年である。まず、正月十六日に仮御堂あるいは御影堂造営モデルとして小棟造りに三帖敷きの小御堂を建立し、二月三日には造営開始。近郷の雑木を集め寄せて造営を進め、三月二十八日には棟上の祝いをしている。番匠方の好粧も美しく、諸国門徒も祝いに駆けつけた。棟上以降の造営については、長押・敷居を吉野の材木であつらえ、天井・立物などは門徒懇志によって整え、屋根居の道具や板敷などは近江国大津で拵えている。四方の縁は深草の宮にあった杉木を買得して造作し、屋根は仮葺きにした後、八月四日より桧皮葺の作業を開始した。八月にはほぼ完成し、二十八日、まず絵像の御影類を仮仏壇に移している。その夜、蓮如は御影堂建立成就のうれしさで明け方まで眠れなかったと述懐している。なお、十月には日野富子が山科本願寺を訪れたという。山科本願寺造営の背景に室町幕府との良好な関係がうかがえる。その後は、橋隠・妻戸の金物なども調えられ、白壁を塗り、地形の高下なども直して十一月中旬ともなったので、十八日に長らく大津にあった「根本之御影像」（木像の親鸞影像）を御影堂に移して、二十一日より報恩講を勤めた（一一七・一一八）。

続いて文明十三年（一四八一）に阿弥陀堂造営が開始される。前年末に蓮如は御影堂造営を喜びつつ、なお事は

尽きていないとして阿弥陀堂造営を企図する。その理由は、本願寺が「忝モ亀山院伏見院両御代ヨリ勅願所之宣ヲカウフリテ、異于他在所」であるからという。ここにも山科本願寺造営の背景として、朝廷との良好な関係の構築がうかがえる。そしてまずは吉野に人を派遣して大柱二十本余を用意させている。年が明けて正月十日より寝殿の大門の造作を始め二十二日に柱立、仮葺屋根を拵えた。その後、二月四日より阿弥陀堂造営を開始し、材木などをとりはからいながら四月二十八日に棟上。その後も春夏と造営が続き、六月八日には仮仏壇を安置し、前住存如の二十五回忌を勤めるに至っている（一二一）。

文明十四年（一四八二）の正月には準備していた材木を用いて御影堂大門の造営を開始。十七日に番匠方の事始をさせ、二十八日には柱立し、ほどなく完成している。その後、阿弥陀堂の橋隠や、四方の柱も造作し終え、続いて大門の地形を整備している。東西南北ともに地形が不同であり、降雨の際に水の流れが悪く坊の前に滞るので、南北に小堀を掘って水の流れをよくしたという。その堀の端に松を植え並べ、門前には橋をかけている。その後、冬の焚き火所として造作していた四間の「小梗」（小棟）を四月七日ごろに作り直し、常屋も取り置いていた吉野柱を用いて修造している。五月六日より未造作部分の工事を進め、寝殿の天井をようやく張り、阿弥陀堂の仏壇を造作して六月十五日に本尊を安置している。漆を誂え置いて閏七月七日より奈良塗師を雇って仏壇に漆を塗り九月二十日ころに完成。さらに絵師を呼び寄せ彩色をさせ、杉障子や仏壇の後ろ障子に蓮を描かせ、次に正面の唐戸も調えている。翌年五月になり、残されていた阿弥陀堂の瓦葺にようやく取りかかり、河内国古市郡誉田之内野中之馬という瓦師を招き、また西山より瓦の土を運んで、大葺屋を建てて五月中旬ごろから瓦を作って八月十二日に葺

き終わる。これにより阿弥陀堂の造営が終了した（一二五）。

以上、煩瑣ではあったが、蓮如御文から知られる山科本願寺両堂とその周辺の造営過程を追ってみた。よく知られた史料ではあり、経過の概略はよく知られているものの、記述の細部に注目した分析は意外に少ない。とくに材木の調達経路や具体的に関係する門徒の地域、そして番匠・漆師・絵師などの存在は注目されるべきであろう。

このようにして造営された山科本願寺両堂については、『山科御坊事并其時代事』第一条[17]に実如時代のこととして次のようにある。まず阿弥陀堂は、

三間四面に四方に小縁、東方の前にハ六尺の縁也、向はさましやうししとみのことくに常の諸堂のことし、左右の脇ハ唐さま、これ又諸堂のことし、さまにほり物あり名失念、本尊木像安阿作如今、左方北太子絵像讃如常蓮如御筆、六高僧御影、右南法然聖人一尊御影讃如常蓮如御筆、両方共に三具足あり、御命日はかり灯明まいる

と記され、三間四面の規模であることや、本尊を中心に、さらに奉懸する御影類の種類などが判明する。

阿弥陀堂は大谷本願寺時代と同じ規模の造営である一方で、御影堂については、

御影堂上檀三間四面、中ハ開山聖人、左方北前住蓮如上人御影、脇板に蓮祐禅尼香炉斗、卓以下如二当時一、右南押板代々御影一幅如信以下存如迄、卓三具足灯台以下当時のことし、猶、南の二間押板に、中に无导光泥字也、〔中略〕左右の脇には夢中善導法然上人の御影〔中略〕、此二尊の御前には何もをかれす、中尊はかり三具足をかるゝ也、猶南に一間の押板には廬山恵遠禅師唐筆墨絵の像をかけられ、前にはかふたてををかれ、花を立られけり、後には蓮如の御筆の不可思議光如来の名号をかけられ、三具足を置かるる也

とある。また内陣（＝上檀）の北側に「北の局」という独立した部屋の存在も推定され、以上のことから御影堂の規模は東向き左右非対称の形式で、正面幅七～八間と考えられている。[18] 大谷本願寺時代の五間四面から考えれば、一回り規模拡大である。ちなみに内陣は「押板」形式で、現在の寺院には通例ある後堂がない道場形式がとられたともいわれているが、一方で史料上「後堂」の表現もあり、検討課題とされている。

なお、山科本願寺については境内の諸殿構成や「寺内町」の形成過程なども重要な問題であり、多くの点が判明するが、ここでは触れられない。

明応八年（一四九九）に蓮如が死去し、五男実如が継職して大永五年（一五二五）に死去するまでの間に、山科本願寺を本山とする戦国期本願寺教団の社会的勢力化は大きく進んだ。「寺中広大無辺、荘厳只如二仏国一云々」[19]とまで評されるほどの繁栄をみた山科本願寺であったが、天文元年（一五三二）八月二十四日、近江六角氏・京都法華衆徒らの軍勢の焼き討ちに遭い、焼失した。実如の跡を継いだ証如の時代のことであり、その後、本願寺は大坂に移転する。

（三）大坂（石山）本願寺

大坂の地は蓮如によって開拓され、その名も蓮如による命名と考えられている。[20]『拾塵記』[21]によれば、摂津国東成郡生玉庄内大坂御坊は、明応五年（一四九六）九月二十四日に蓮如が自ら確認した地である。「虎狼のすみか」で人家はなく畑ばかりであったところに、九月二十九日より鍬入れを始め、番匠の作業も始まり、十月八日には草

坊が建立されたという。十月二十六～二十八日には報恩講も勤められ、蓮如はその後、大坂御坊を隠居所として三年住んだ。そして明応七年十一月に、死期を悟った蓮如は山科に戻り翌年三月に死去するのである。なお、この大坂御坊は蓮如が大量に書いた名号の礼金で建立されたと伝えられている。[22]

その後、永正年間の河内錯乱の際には蓮能尼（蓮如の最後の室）とその息実賢（蓮如十一男）らが大坂御坊を拠点としていたことが知られるし、実如もまた隠居所として大坂御坊を予定していたという。本願寺移転以前から確かな規模を有していたとみてよい。蓮如時代の大坂御坊にはすでに持仏堂があったと『山科御坊事并其時代事』第二十二条[23]に記されている。「四間次二間、なんと二間」の規模で「敬信閣」という額を掲げたという。本堂の規模を推測する上で参考になる規模情報である。

さて、山科を焼かれた証如らは大坂を新たな拠点と定めた。これにより、もともとあった大坂御坊の本堂にまず親鸞影像を仮安置することになった。蓮如十三男実従の日記である『私心記』[24]の天文二年（一五三三）十一月二十一日条には、

開山御影、御堂北之押板へ被奉移候、押板ヲ西ヘヒロケラレ候、御影供三色也、三具足・打敷等如常、押板ニサマ障子タチ候

とある。ここから大坂御坊の本堂も東向きで押板形式であったことが判明するが、この段階で正面本尊向かって右（北）の押板を奥（西）に広げて、奥行を拡張し、木像の親鸞影像を置けるスペースをつくったのである。

ところで、大坂御坊が最初から山科本願寺と同格かそれ以上の規模の堂舎を持つことは、本山と御坊の関係から

すれば考え難くないだろうか。天文初年以降の整備過程で何らかの拡張を施したと推測したいが、実態は明らかにならない。『私心記』や『天文日記』[25]（証如上人日記）から確認できる情報について次に挙げていきたい。

まず天文二年七月二十五日に大坂に到着した『私心記』の記主実従は「酒殿」にて下間筑前に会い、「御亭」にて証如と対面し、「御ウヘ」にも参った上で、「座敷ナキ」により、阿佐布所に逗留している。ここから大坂御坊には御堂のほか、酒殿（寝殿）・亭があり、また証如一家の住居空間はあったものの、一家衆が逗留する座敷スペースまではなく、御坊の外に坊主衆の居を構える宿があったことが知られる。その後、前述のように十一月二十一日の親鸞影像仮安置がある。

次に『私心記』天文三年の各条を見ると、歴代忌日の日中法要を「内陣」で執行することを特筆する記述（如信・正月四日日中など）がある一方で、法然（正月二十四日太夜）と聖徳太子（二月二十一日太夜）に関しては「南座敷」で執行している。また「御堂局」の存在も確認できる（正月十五日）。『天文日記』天文五年（一五三六）正月十五日条や天文六年二月二十四日条の御堂における演能で御簾を懸ける記述から、七間幅のあることが確認できるので、内陣三間、南座敷・局ともに二間の合計七間、これが御堂の正面幅の規模と考えられる。

さらに『私心記』天文五年二月二十八日条から「御堂南ノ落間」、『天文日記』天文十年八月二日条から「局次」、『天文日記』天文六年三月二日条には「御堂うしろの座敷」の存在が確認できる。また、天文六年一月八日条には仏事のために「南ノ縁カコワレ候、二間ノ分也」とあったり、天文十四年八月二十五日条にも「御堂内七間ト又南庭縁ト八間座敷ニ一ツニナリ候」とあったりすることから、広縁・大床部分などは可変的な作りになっていたもの

とも考えられる。

『私心記』天文四年五月二十六日条には親鸞影像を南座敷に移して厨子に入れる記述があるが、これは内陣の改修工事の開始が背景にあるのだろう。その後も法要行事を内陣・南座敷などで執行する記事があり、記主実従が執行場所について戸惑いを示す表現もあることなどから、堂舎整備が過渡期的状況であることがうかがえる。

さて、天文五年（一五三六）ころまでは山科に帰る意志とその可能性を残していたようであるが、翌年には常住衆の大坂出仕を命ずるなど、大坂を本願寺とする方向で固められていく。続いて、『天文日記』によると天文七年（一五三八）七月二十一日、御堂の本尊左右に天牌が安置されている。

天文十一年（一五四二）になると、新阿弥陀堂の造営が開始され、同年中に完成を見る。その経緯を『天文日記』『私心記』、さらには『天文十一年阿弥陀堂御礎等之記』[26]も加えて追ってみれば次のとおりである。

七月十六日に阿弥陀堂の石礎がおこなわれ、中居衆や番匠方に加えて、町衆百二十人、加州衆五十七人、番衆方百八十人などが参加している。同二十一日には柱立。ここでも町衆五十人、番衆方二百十人という記録がある。さらに

一、京番衆百卅人、ゐ中番衆六十人、加州衆八十人

一、はんしやう（番匠）五十一人、加冶（鍛冶）衆八人、ひわたし（桧皮師）十八人、なか引てつたい小工九十人

とも記録され、さらに木屋見・大工なども含めて、造営に関わる人びとの顔ぶれとその人数がうかがえる。そのな

かで、番衆は全国地域教団から上山し、一か月交替で本山の日常運営に関わる門徒である。[27] 一向一揆組織論においても注目され、戦国期本願寺教団の基礎構造として評価されている番衆組織が、やはり当たり前のように造営作業に関与したのである。番衆が京番衆と田舎番衆に別れていること、加賀国門徒衆が別に特筆されることも、教団構造を考える上で興味深い。ただし、逆に言えば全国規模での門徒のお手伝い上山はないということでもある。

そして七月二十六日に棟上、十一月十九日には阿弥陀堂が完成し、新造の本尊の移徙が執行される。本尊の後ろには新しい仏壇が置かれ、また御影堂においては新しい厨子に親鸞木像が遷座する。ついに両堂が完成し、二十一日より報恩講が執行されるのである。

大坂本願寺の御影堂については基本的な御堂七間に「南落間」「局次」さらに「大床」などを加えれば十一間になるかと推測されているが、なお検討を要する。阿弥陀堂の規模も不明である。『天文日記』天文二十二年（一五五三）九月四日条には「阿弥陀堂北二間」や「南三間」、『私心記』永禄三年（一五六〇）四月二十七日には「阿弥陀堂北六間」とあり、御影堂に匹敵する規模になっているのではないかと推測される。なお、その他の殿舎として天文十三年（一五四四）に寝殿、天文十七年（一五四八）に亭・「うへ」・「北向」、弘治三年（一五五七）には新造屋敷が造営されている。大坂本願寺時代は造営が続いた時代とも言え、戦国期宗教勢力として規模を拡大しつつあった本願寺教団の実力が反映されていると見ることもできる。

ところが、永禄七年（一五六四）十二月二十六日、大坂本願寺とその寺内町は火災により焼失する。[28] 永禄二年（一五五九）に門跡になり、永禄四年（一五六一）には親鸞三百回忌を勤めて、内陣荘厳等を再整備してまもなく

のことである。翌年にかけて再建されるが、『永禄八年阿弥陀堂之御礎之記其他』[29]からは、阿弥陀堂が正月二十三日の石礎、二月三日の柱立で、また「阿弥陀堂は津国部（郡カ）山の御堂を進上被申候、ひかせられ候て先かりに被立候、御亭は新敷立申候」とあり、摂津国部山（郡山カ）の堂舎の移築であったことが知られる。二月五日には亭の柱立が始まり、造営作業は進む。四月二十二日には顕如が興正寺から阿弥陀堂に移っている。

八月十四日には御影堂の石礎が始まり、『永禄八年阿弥陀堂之御礎之記其他』には、

一、御影堂之御石つき朝早くより御座候〔中略〕

一、石つき衆ニ中食被下候、〔中略〕御番衆・弓持・鑓持・荷持三方、百五十人、此内当番子共まて大坂番衆卅五人、こやのてつたい九人、かちのてつたい六人、やねふき六人、奉行衆一人、以上百九十七人〔中略〕

一、町衆二百十四人、加州衆四十五人〔中略〕

一、大工衆けんすい被下候、二百六十人、同小工〔中略〕

一、かわらし（瓦師）十八人、同小工十三人、かへぬり廿人小工同、かち（鍛冶）四十五人、小工十三人、又三人

一、六町ノ長衆百人、　合テ千二百廿五人〔後略〕

とあり、造営に関わる人びとの顔ぶれとその人数がうかがえる。しかし、ここでもまだ、大工ら技術集団の出自等の実態までは判明しない。九月二十六日に柱立、十月八日に棟上、十月十九日には瓦を葺き、十一月十八日には親鸞影像が遷座している。

この永禄八年再建の両堂が、天正八年（一五八〇）の石山合戦終結まで存続することになるのである。

二、天満本願寺の造営をめぐって―中世から近世へ―

天正八年（一五八〇）の石山合戦終結により、大坂本願寺は焼け落ち、顕如・教如らは紀伊鷺森へと落ち延びる。その後の流転史を見ていくと、紀伊国鷺森御坊に天正十一年（一五八三）七月まで、そこから和泉国貝塚御坊に移り、天正十三年（一五八五）八月まで拠点とし、同月末に摂津国天満（中島）に移っている。鷺森・貝塚は門主顕如を中心とした本願寺中枢部が明らかに一時期、常住拠点としたが、顕如らはそこを本願寺とはしなかった。石山合戦後の本願寺教団は織豊政権と緊張関係をはらみながらも関係を再構築しつつ、本願寺再興を目指していったのであるが、その本願寺再興は大坂城の対岸に位置する天満においてなされることになる。

（一）阿弥陀堂の造営―天正十三年―

天満（中島）本願寺の造営においては、阿弥陀堂が先に着工し完成する。まず天正十三年の貝塚からの移転経緯と阿弥陀堂の造営過程を追い、論点を確認してみたい。

本願寺家臣宇野主水が記した『貝塚御座所日記』[30]によれば、天正十三年四月二十六日条に「今度、門跡寺内ニ渡辺ノ在所ヲ可被仰付由、秀吉被仰也」とあり、豊臣秀吉によって寺地が指示され、移転が決定した。五月三日に本

願寺家臣下間頼廉らが寺地受け取りに大坂城へ出向している。また、その翌日には秀吉自らが出向いて「縄打」をさせ、寺地の実測をしている。

中嶋天満宮ノ会所ヲ限テ、東ノ河縁マテ七町、北へ五町也、但、屋敷へ入次第ニ、長柄ノ橋マテ可被仰渡云々、先以当分ハ七町ト五町也、元ノ大坂寺内ヨリモ事外広シ

とあり、天満寺内の規模・構成は東西七町、南北五町で、大坂本願寺の寺内町よりも広い規模であった。ちなみに、天満寺内には十二の町（樵斎町・樵斎下町・上町・北町・市場東町・市場町・長柄町・南町・サイカ町・西町・五日講町・（長柄町）西南町）が史料上で確認され（かつての大坂寺内の町数は十と考えられている）、周辺には港湾・浜・墓所や集落なども存在する複合都市地域で、寺内町居住商人の屋号は四十数種が知られ、多様な職業集団を包括する商業都市と評価されている。[31]

その後、下間仲康を普請奉行として造営が進められた。『貝塚御座所日記』によれば、六月十二日には「天満宮ノ寺内屋敷之普請」につき興正寺顕尊が大坂に出向いているし、同月二十七日にも法嗣教如が「中嶋ニテ寺内屋敷」を訪れている。ついで『天正十三年阿弥陀堂御礎其他記』[32]によれば、八月四日、阿弥陀堂と、さらに御亭・御上・御台所の石礎が置かれ、同月十日に阿弥陀堂の立柱式。大工衆二百人規模の造作と知られる。ちなみに九月六日条には「阿弥陀堂ハかり立に御座候間」とある。阿弥陀堂は仮堂造営だったのである。

八月三十日、顕如らは貝塚から天満中島に移ったが、御供の諸候人らの私宅はまだなく、「不弁之式不及言語」と『貝塚御座所日記』は記す。「秀吉公より被仰付、当所ニまつ〳〵草堂ヲ建立アリタル也」とあり、やはり仮堂

段階の状況がうかがえる。九月八日には本願寺顕如が、如春尼（室）、教如（長男）、興正寺顕尊（二男）、准如（三男）らを伴い大坂城に赴き、天満移転の礼を述べている。なお、九月十三日には、勅勘を蒙った山科言経が、冷泉為満・四条隆景らとともに興正寺顕尊の縁故（言経・顕尊の妻同士が姉妹）を頼り天満寺内へ入って居住した。その後、『言経卿記』が天満本願寺寺内町に関する重要史料となるので付記しておきたい。

以上のように天満移転の状況をみてきたが、秀吉自らが縄打に出るなど積極的な関与が知られ、豊臣政権と本願寺教団の関係が、この時期どのように構築されようとしていたのかという問題が浮かび上がる。もちろんこの問題については従来、議論があるので、次にまとめてみたい。まず、秀吉自身が一向宗門徒であったという説に史料的根拠はないが、フロイス『日本史』第二部九三章・一二〇章によれば、秀吉の母大政所は一向宗門徒であったという。[33]これは考慮に入れるべきであろう。とはいえ、問題は豊臣政権総体としての意図であり、先行研究によれば、それは次の二点に整理される。[34]

一つには、本願寺の監視とその中世的権威、勢力構造の解体である。フロイス『日本史』第二部第六六章では、

大坂の仏僧（顕如）に対しては、彼が悪事をなさずなんらの裏切りなり暴動をなさぬように、秀吉の宮殿の前方の孤立した低地（中之島、天満）に居住することを命じたが、その住居に壁をめぐらしたり濠を作ることを許可しなかった

と記す。[35]本願寺の京都移転を記録するフロイス『日本史』第三部第四四章でも、秀吉の本願寺に対する意図の一つとして、

天下を攪乱することがないよう、将来におけるなんらかの不穏な動きを抑制するために、自らの許に留め置くことを望んだからである

と記すから[36]、キリシタン史料という性格に留意するとしても、見逃せない指摘である。

ちなみに、豊臣政権によるキリシタン禁令に関わる天正十五年（一五八七）六月十八日付の秀吉朱印状写（十一箇条覚・バテレン宣告文[37]）の第六・七・八条は次のようなものである。なお、この史料の性格についてさまざまな議論があるが、ここでは論じず、文面のみを問題とする。

一、伴天連門徒の儀は、一向宗ゟも外ニ申合候由、被聞召候、一向宗、其国郡ニ寺内をして、給人へ年貢を不成、并加賀一国門徒ニ成候而、国主之富樫を追出、一向宗之坊主もとへ令知行、其上越前迄取候而、天下之さはりニ成候儀、無其隠候事

一、本願寺門徒、其坊主天満ニ寺を立たせ、雖免置候、寺内ニ如前々ニ者、不被仰付候事

一、国郡または在所を持ち候大名、その家中の者共を伴天連門徒に押し付け成し候事は、本願寺門徒の寺内を立て候よりもしかるへからさる儀に候間、天下の障りに成るへく候条、その分別これなき者は、御成敗を加えらるへく候事

これ自体は、キリシタンを一向宗・本願寺とその寺内よりもさらに「天下の障り」として「外に」置くことを記すのと同時に、天満本願寺を建立させたけれども前々のような寺内特権を認めないという内容であるが、一向宗・本願寺とその寺内を、豊臣政権が問題視していた認識が確認できる。実際にこの時期はまだ北陸や東海の諸地域にお

いて一向一揆の可能性が残されていた。本願寺・一向一揆への対処は、豊臣政権において緊張感をはらんだ課題であったと見られる。そして本願寺の中世的権威の解体が、後述する天正十七年（一五八九）の寺内検断において進展することになるのである。

もう一つには、大坂城下町の複合的発展を企図し、本願寺教団の経済力と町の開発力に期待した点が挙げられる。大坂城は天正十一年（一五八三）、大坂本願寺の跡地に建設が開始され、天正十三年段階では城下町の整備が進められていた時期と考えられる。前出フロイス『日本史』第三部第三三章でも、本願寺の京都移転を命じた秀吉の意図の一つとして、本願寺参詣者の激しい出入りにより町が発展、人口増加で豊かになることを欲したことが記されている。天満の場合も同様の理由をみてよいだろう。

山科・大坂そのほか各地の寺内町を建設してきた本願寺教団・門徒は明らかに土木技術を有していた。『貝塚御座所日記』によれば、天正十四年（一五八六）四月十五日には秀吉の命令により天満寺内河縁の堤の普請を請け負っている。同年六月一～六日条でも、

六月一日ニ雨降、（中略）四日ニモ雨止テ空ハ曇、早旦ヨリ河ノ水連々ニ増、四日ノ晩景、河ノ堤ヘ一尺モ二尺モ水カヽル、（中略）去夜（＝五日夜）ノ間ニ、堤ヘカヽリタル水コト〳〵ク引、いまた平生ノ所ヨリハ水ハルカニ高シト云々、（中略）フル川ハ東西ノ岸ヲ越テ家々ヘ水入、東ノ方ヘハ猶以水入テ無正体式也

とある。堤の存在が確認されると同時に、前出フロイス『日本史』第二部第六六章でも指摘される天満中島寺内の低地性も確認されるのであり、そこにあえて本願寺を置き、土地開発をさせた点が注意される。

（二）御影堂の造営―天正十四年―

続いて天正十四年の御影堂造営について見ていきたい。天正十四年一～八月の間に発給されたとみられる次のような顕如書状（『顕如上人文案』巻中（三〇））[38]がある。

態染筆候、去年秋比より摂津中島のうちに寺内を再興せしめ、本尊・開山の真影を安置申事、予か満足大方ならす候、しかれは諸国門葉参詣の心さしあさからさる事、本望是に過す候、まつまつ、かりに草堂をとり立候へとも、此分にては余聊爾の体、ひとつは外聞もいかかにて候間、来八月十三日、前住年忌のまへに御堂建立の有増にて候、いまにはしめす候とも、門下の懇志なくてはたのむ事なく候、此砌同行たかひに志をはけまれ候て、弥難有報謝にも相叶候、それにつきては――猶真宗寺可申伝候、あなかしこ、

月　日

西国門徒衆中

中国――――

四国――――

これによれば、御影堂造営は、本願寺前住証如の三十三回忌の前に完成するよう急いだことが知られる。また、この顕如書状は、造営に関する門徒の懇志をたのむ内容から、「募化消息」の初見とされている[39]。確かに残存する消息史料群ではこれが確実な初見となるが、すでにみてきたように、本願寺そのものは常に門徒の懇志により成り立っ

ており、造営の際にも本願寺歴代の意志に呼応した門徒らの懇志が見出されている。あえて、この段階の画期を指摘するならば、長らく続いた石山合戦期において繰り返された懇志・馳走依頼という経験的蓄積の上に、この天満造営に関する懇志依頼もあるということになろうか。あるいは一向一揆における懇志・馳走体制が、後の造営体制の構築に関しても何らかの影響を及ぼしていると見るのは考え過ぎであろうか。

さて、造営の具体的経緯は、『貝塚御座所日記』によれば、

六月朔日ヨリ御堂屋敷ノ地ツキ、志次第ニ各罷出テハタラク、今日ハ礎ヲスユル所ヲ、まつ〳〵下ノ土ヲヨク築カタムル事也、四日礎ツキ有之、石ヲ少しスヘタル也、夫々ニスユヘキ由也、今日御日執ニヨツテノ事也、こは飯ニテ御祝儀アリ、作事奉行衆、其外奉行スル衆ニ、御祝儀ヲ被下訖、惣ヘハ無之、主水ナトハ御前にて御祝ヲクタサレタル也

とあって、六月一日から地築が始まり、続いて四日から石礎。『天正十四年天満御堂工作移徙記』[40]には、

一、御堂御石つき、六月廿六日ヨリ御柱立申候シ、廿八日にハ棟まて上申候

とあり、二十六～二十八日に柱立。『貝塚御座所日記』にも

六月廿八日、御影堂柱立、但三日巳前ヨリ連々ニ柱ヲ立テ、当日ハ儀式之体也、コウリヤウノ上ニ棟ノ小屋カマヘト云事ヲシタル也、コレカ柱立也〔後略〕

とある。虹梁の上に棟の小屋構えをするのが柱立であるとの説明がある。また、『天正十三年阿弥陀堂御礎其他記』には、

六月廿八日

一、〈天満〉御影堂之御柱立御座候〔中略〕大工衆五百三人、小工同□□ハカリ、小引廿一人、〈奉加ニ参〉杣十一人、ぬり五人、御つしぬり申候、かわらし一人〔中略〕

一、寺内衆百六十五人、大坂之町衆百人、〈町ニ在之〉雑賀御供衆廿人、こやのてつたい十二人、かち廿五人、番衆中卅人、川はた衆卅人、御奉行衆十一人、同下十五人、〈おもて　御うら〉御中居衆十人是ハはたらき申候、〈うらおもて〉御下間廿二人、是もはたらき申候、以上、千五百十二人

とあり、技術集団と町衆あわせて相当数の関与を読み取ることができる。

御影堂の棟上は七月十九日に執行された。前出『天正十四年天満御堂工作移徙記』には、

一、七月十九日、御棟上、十八日之晩ヨリ御堂之棟ニ南北ニ弓矢ヲ置申候、但北之方ハカリマタ中ハ弊ニテ候、

「御棟上天正拾四年丙戌七月十九日卯辰之間」（棟札）

此札之下ニ間を置候て、御大工　藤原宗家

棟梁　藤原家次　と書

一番ニ門守り両人出候て、御屋禰之両の脇ニ居、但弓箭を帯ス、其後槌を三人持て、御大工・棟梁之前へ出、二のつちハ内陣へ持て参、大かうの柱をうち申候、一のつちハ棟へ持て上り、後ニ棟梁、棟にてうち申候シ

とあり、棟上の様子を伝えるとともに、棟札を記録し、大工「藤原宗家」、棟梁「藤原家次」の名を伝える。ちな

みに「藤原家次」は、後に教如が文禄四年（一五九五）に鋳造した大谷本願寺の梵鐘銘にもその名がみえる。

ところで、『貝塚御座所日記』では、

七月十九日　御影堂御棟上、卯辰刻、儀式別ニ注之、今日、参詣衆群衆於川端、ムカヒノ武士之族、ツフテヲ打カケナトシテ、アケクニ両方タヽキアヒ、又大坂ノ町人ニ御門徒之衆モ出合テ防之、アマタ帷ナトヲ取、女房トモヲ引サカシ畢、〔中略〕所ハ河端ノウラムカヒ也

とあり、御影堂棟上に際して川を挟んで騒動のあったことを記している。天満本願寺方・大坂城方相互の友好ならざる感情がうかがえるとともに、実は天満寺内のどこに本願寺が造営されたのかという問題が浮かび上がってくる。天満本願寺の立地については、①江戸時代の天満興正寺跡（寺内中央やや南）説と②川岸（寺内東端）説の二説がある。[41] 前掲史料からすれば、つぶての届く川岸説が有利かともとれ、またそれを示唆する近世史料もある。[42] しかし真宗寺院の基本は東向きであり、天満もおそらくそうであろう。とすれば、寺内東端川岸に立地したというにはどうしても違和感が残る。本願寺の後ろに寺内町が展開したのであろうか。一方でそのような配置を強いたのだとすれば、豊臣政権の本願寺政策の意図の問題になろう。いずれにせよ、寺内町全体の議論の中で歴史地理的分析もふまえて考えなくてはならず、今後も課題である。

御影堂が完成し、八月三日に移徙の法要が勤められた（『天正十四年天満御堂工作移徙記』『天正十三年阿弥陀堂御礎其他記』）。当日は朝勤を阿弥陀堂でした後、「御影様」（親鸞木像）が御影堂に移徙し、日中法要と斎が執行された。そして、六日から十三日日にかけて、証如三十三回忌が勤められたのである。『貝塚御座所日記』には、

六日、太夜ヨリ十三日前住御仏事始行、国々御一家四十六人歟、諸国坊主衆三百人計参勤云々、七ヶ日御経アリ、別紙ニ注之、

とある。法要には一家衆・諸国坊主衆、家臣団らが参列した。その際に本願寺顕如に誓詞を提出している。この証如三十三回忌の執行において、本願寺は平時回復を遂げたという指摘がある[43]。同年の別の儀式に関する『貝塚御座所日記』の記述でも「近年乱世ニヨツテ無其儀、当年旧儀御再興之体也」とあり、象徴的な表現である。確かに両堂が完成し、天満において本願寺が再興を果たしたのであり、石山合戦から続いていた「乱世」が終わり、「再興」のときを迎えたのである。八月十八日には秀吉が突如、天満を訪れ、完成した両堂を見学し、顕如らが秀吉を饗応した。これ以後、天正十九年（一五九一）までのわずかな期間ではあったが、天満本願寺の時代が続くのである。

天満本願寺の御影堂の規模については、「十間四方」と記す史料がある。山科・大坂と同規模からそれ以上なのであるが、その史料『法流故実条々秘録』[44]によれば、寛永八・九年のころに西光寺祐俊に対して七～八十歳の老人三人が昔、天満本願寺に朝暮参詣した記憶として次のように伝えている。

天満御座候時ハ、御堂十間四方計、ヤネハトリフキ也、廻リ屏ハ高さ六尺計、ヤネハ小麦藁也、御対面所ハ上壇モ無之、御一家衆御斎之時、着座ノ敷居ノ内計ニ畳シカレ、縁ニハ竹ヲワリ打付被置候キ、当時東西御多家者、御堂・御対面所・御台所等ニ至迄之美麗参詣之度毎驚レ目ヲ古ヲ存出候由被申候

十間四方はあるものの、その作りは不十分なものであったといい、前出の同時代史料からも知られる突貫的造営であったことを示す貴重な後世の証言である。とはいえフロイス『日本史』第三部第四四章[45]では、

大坂に近いところ（天満）にすでにかなりの大きさの町と多数の美しい寺院を造営し、そこを本拠としていた〔中略〕一向宗の信徒の、この僧侶（顕如）に対する帰依と愛情ならびに従順さは非常なもので、短期間にして摂津天満に造営された市（まち）は、仏僧の宮殿や寺院に関しては、都のそれを凌駕するほどになっていたともある。天正十四年以降の造営による両堂などの整備を示唆する内容として注目される。

その後、天満本願寺に対して豊臣政権は、天正十七年（一五八九）のいわゆる寺内検断事件[46]をもって介入する。秀吉勘気者と罪科人の天満寺内居住をめぐり関係者が処分する過程で、従来の寺内特権が規制され、不入権が否定され、経済特権があらためて付与されることにより、本願寺の中世的な寺内支配権が消滅し、近世的支配体制へと変容を余儀なくされたのである。同時に本願寺宗主家と家中（一家衆・家臣団）と寺内町民の宗教的紐帯が解体され、本願寺教団そのものの変質が進むことになる。

以上、天満本願寺の造営とその周辺について確認してきた。その造営に関して天満以前と大きく異なるのは、やはり豊臣政権という政治権力との関わりであろう。山科・大坂の造営の際も当然、室町幕府をはじめとした諸権力との良好な関係が背景に見出されるが、直接的に立地をはじめとする諸条件に政治権力の意図が加わるのは天満が最初である。当たり前のことであるが、確認しておきたい。その一方で、造営に関わる人びとの実態はなかなか明らかにはならないものの、史料の残る大坂と天満を比較しても、造営作業の実態はおそらくほぼ同じではないかと考えられる。繰り返された造営のなかで技術が培われ、経験が蓄積されたことは推測に難くない。また専門的集団のみならず、寺内衆すなわち寺内町民や、全国各地から上山して本山で宗教的役勤仕をする番衆らの、造営作業へ

の関与は、地築や諸種手伝いなどに見出せる。とはいえ、近世（江戸時代）のような全国規模の体制整備を読み取ることは難しい。中世はそのような段階なのであり、造営の歴史像に当該期の本願寺教団のありようを重ねてみることは重要であろう。

おわりに

天正十九年（一五九一）、本願寺は秀吉の指示により天満を退去し、京都へ移転する。その理由や歴史的意義についても諸説があるが[47]、これらを検討することは次の課題である。豊臣政権の京都をめぐる宗教構想や、本願寺教団の中世から近世への変質を考えながら、六条寺内の造営過程などを検討していく必要があろう。

また、天正二十年（一五九二）十一月二十四日には顕如が死去し、教如が継職するが、文禄二年（一五九三）十月、教如は豊臣政権により強制的に退隠させられ、弟の准如が本願寺を継職する。その後、慶長七年（一六〇二）教如は徳川家康から京都東六条に寺地四町四方の寄進を受け、慶長九年（一六〇四）にかけて両堂を造営し、東本願寺を分立する。近世（江戸時代）の造営史[48]についても次の課題であるが、すでに検討を蓄積中である。

本稿では、近世以前の本願寺造営史について基本史料や先行研究に拠りつつ概括してきた。冒頭で示した造営史の視点から新たに明らかにできた点は、史料的制約もあって、多くはない。しかし、通史的にみたことで、全体的な歴史像を把握していくための基本的な理解を進めることができたと考える。研究の現状は、既存史料を再読解、

新史料の活字化、読解により実証的作業の進展が期待できる段階であり、今後も作業を進めていくことにしたい。

註

(1) 真宗大谷派（本山東本願寺）より大谷大学真宗総合研究所に委託された特別研究である。現在の東本願寺両堂が明治年間の完成であり（「平成の御修復」が現在も進行中）、明治度造営の歴史を明らかにすることにもっとも多くの紙幅が割かれる予定ではあるが、それだけではなく、中世本願寺の成立と歴史的展開から、東本願寺の創立、そして近世（江戸時代）を通じた造営史も章立てされている。すなわち、造営史という視点を軸にしたものながら、初めての東本願寺教団通史の試みとも言え、成功すればその意義は多大である。なお、真宗本廟とは真宗大谷派における本願寺の正式名称である。

(2) 実に枚挙に暇がなさ過ぎる質量であり、到底ここで十分に紹介することはできない。研究レベルにおける通史的なもののみいくつか挙げてみれば、『本願寺史』第一巻（浄土真宗本願寺派、一九六一年）、井上鋭夫『本願寺』（至文堂、一九六二年。講談社学術文庫で二〇〇八年再刊）、細川行信『大谷祖廟史』（真宗大谷派宗務所出版部、一九八五年）などがある。また、造営の視点から中世本願寺の通史に言及するものとして、『明治造営百年　東本願寺』（財団法人真宗大谷派本廟維持財団、一九七八年）の下巻に収載される細川行信「本廟・本願寺の歴史―草創より幕末までの変遷―」も挙げておきたい。本稿の各論で必要な先行研究の個別については、それぞれの箇所で触れることにする。

(3) 建築史的研究からの中世本願寺への注目としては、桜井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』（法政大学出版局、一九九七年）が大著であり、また川上貢「大坂石山本願寺の殿舎について」（同『日本中世住宅の研究』〔墨水書房、一九五八年〕、初出一九五四年）、福山敏男「東本願寺の建築（『寺院建築の研究』下、中央公論美術出版、一九八三年）、伊藤毅『近世大坂成立史論』（生活史研究所、一九八七年）などの研究が注目される。建築史の専門的内容に学ぶべき点は多大ながら、それらをふまえて、真宗史・本願寺史の理解をどう深めるかが課題となる。

(4) 『大系真宗史料　特別巻　絵巻と絵詞』（真宗史料刊行会編・小山正文担当、法藏館、二〇〇三年）一八―一九ほか。

(5) 「大谷廟堂創立時代文書」（二二）青蓮院下知状案（『真宗史料集成』第一巻〔同朋舎、一九七四年〕九九四―五頁）。

(6) 木場明志「真宗本廟造営史への挑戦」（本誌後掲講演録）。

(7)『真宗史料集成』第一巻（法藏館、一九七四年）八七〇頁。
(8)「大谷廟堂創立時代文書」（二三）本願寺親鸞上人門弟等愁申状（『真宗史料集成』第一巻〔法藏館、一九七四年〕九九五頁）。
(9)『存覚一期記』（『真宗史料集成』第一巻〔同朋舎、一九七四年〕八七三頁。
(10)存覚一期記』（『真宗史料集成』第一巻〔同朋舎、一九七四年〕八七四頁。
(11)『真宗重宝聚英』第十巻（同朋舎出版、一九八八年）一八四頁。
(12)『蓮如と本願寺―その歴史と美術―』（図録、毎日新聞社、一九九八年）。
(13)天正八年（一五八〇）願得寺実悟（蓮如十男）作の故実書。『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）五六七頁。
(14)服部幸子「（資料紹介）醍醐寺文書「満済准后自筆公家御祈以下條々置文」について」（『大谷大学史学論究』第八号、二〇〇二年）
(15)草野顕之「山科本願寺・寺内町の諸様相」（山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち　山科本願寺と寺内町』〔法藏館、一九九八年〕六七頁）。草野顕之『蓮如上人と山科』（真宗大谷派山科別院長福寺、二〇〇二年）、草野顕之『戦国期本願寺教団史の研究』（法藏館、二〇〇四年）第Ⅲ部第一章「本願寺の堂舎と荘厳の変遷」（初出一九九四年）
(16)「諸文集」（一一〇）（一一四）（一一七）～（一二一）（一二五）（一三一）（一四六）（『真宗史料集成』第二巻〔同朋舎、一九七七年〕二三一―二六七頁）。
(17)天正三年（一五七五）願得寺実悟（蓮如十男）作の故実書『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）五四三―五四四頁。なお、本稿で掲げる史料文中にある（　）内の字は補足書きであり、〈　〉内の字は次の語句の右上に付される傍註の字である。適宜、中略・後略した箇所を〔中（後）略〕と示した。
(18)櫻井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』（法政大学出版局、一九九七年）、草野顕之『蓮如上人と山科』（真宗大谷派山科別院長福寺、二〇〇二年）などの議論を参照。
(19)『二水記』天文元年八月二十四日条（『大日本古記録』所収。山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち　山科本願寺と寺内町』〔法藏館、一九九八年〕二七六頁参照）。
(20)ちなみに「石山」という表現は江戸時代以降の史料にしか確認されず、同時代表現は「大坂」である（吉井克信「戦国・

中近世移行期における大坂本願寺の呼称―「石山」表現をめぐって―」（『ヒストリア』第一五三号、一九九六年）。

(21) 願得寺実悟（蓮如十男）作の蓮如伝の一。『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）六〇九頁。

(22) 『拾塵記』（『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）六〇七頁）。

(23) 『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）五四七頁。

(24) 『真宗史料集成』第三巻（同朋舎、一九七九年）。

(25) 『真宗史料集成』第三巻（同朋舎、一九七九年）。

(26) 龍谷大学大宮図書館蔵。図録『本願寺展』（朝日新聞社、二〇〇八年）参照。

(27) 金龍静「「卅日番衆」考」（『名古屋大学日本史論集』上巻、吉川弘文館、一九七五年）。

(28) 『言継卿記』永禄七年十二月二十七日条、『今古独語』（『真宗史料集成』第二巻（同朋舎、一九七七年）ほか。

(29) 龍谷大学大宮図書館蔵。図録『本願寺展』（朝日新聞社、二〇〇八年）参照。

(30) 『真宗史料集成』第三巻（同朋舎、一九七九年）。また『寺内町研究』創刊号（一九九五年）～第六号（二〇〇二年）において大澤研一氏による史料翻刻があり、本稿ではこちらに拠った。

(31) 鍛代敏雄『中世後期の寺社と経済』（思文閣出版、一九九九年）第二編第四章「寺内町の解体と再編」（初出一九八七年）。また天満寺内の都市史的研究として、伊藤毅『近世大坂成立史論』（生活史研究所、一九八七年）「天満の成立―摂津天満本願寺寺内町の構成と天満組の成立過程―」（初出一九八七年）、『日本都市史入門Ⅰ空間』（東京大学出版会、一九八九年）、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅴ（大阪市文化財協会、一九九五～二〇〇三年）なども参照。

(32) 龍谷大学大宮図書館蔵。図録『本願寺展』（朝日新聞社、二〇〇八年）参照。

(33) 『完訳フロイス日本史4豊臣秀吉篇Ⅰ』（中公文庫、二〇〇〇年）一六七―一六八頁。『キリシタンが見た真宗』（東本願寺、一九九八年）二五六・二六二頁も参照。

(34) 前掲註（31）鍛代論文ほか。

(35) 『完訳フロイス日本史4豊臣秀吉篇Ⅰ』（中公文庫、二〇〇〇年）五四頁。

(36) 『完訳フロイス日本史5豊臣秀吉篇Ⅱ』（中公文庫、二〇〇〇年）一七九―一八〇頁。

(37) 『御朱印師職古格』（伊勢神宮文庫）。安野眞幸『伴天連追放令　16世紀の日欧対決』（日本エディタースクール出版社、一

九八九年）一九一―一九二頁参照。

（38）『真宗史料集成』第三巻（同朋舎、一九七九年）一一七四―一一七五頁）。

（39）『真宗史料集成』第六巻（同朋舎、一九七九年）四六頁。

（40）『西光寺古記（本願寺史料集成）』（同朋舎出版、一九八八年）一七三頁。

（41）『天満別院誌』（天満別院誌編纂委員会編、一五六一年）。

（42）『天満別院誌』四四頁に、『上壇間日記』元文五年（一七六〇）五月条にみえる「口上覚」が掲載されており、「一、当天満御坊者往古川崎御堂にて御座候処、教如上人様御在寺被遊候節、川辺に被成候故、只今之敷地へ御引移被遊候（後略）」とある。

（43）太田光俊「大坂退去後の坊主衆の動向」（大阪真宗史研究会編『真宗教団の構造と地域社会』、清文堂出版、二〇〇五年）。

（44）『真宗史料集成』第九巻（同朋舎、一九七六年）四一三頁。

（45）『完訳フロイス日本史5豊臣秀吉篇Ⅱ』（中公文庫、二〇〇〇年）一七九―一八〇頁。

（46）前掲註（31）鍛代論文・伊藤論文、早島有毅「豊臣政権の寺社政策」（朝鮮日々記研究会編『朝鮮日々記を読む　真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略』所収、法藏館、二〇〇〇年）などを参照。

（47）大桑斉「都市文化の中の聖と性」（『岩波講座近代日本の文化史2コスモロジーの「近世」19世紀世界2』、岩波書店、二〇〇一年）、佐藤文子「京都本願寺の境内地をめぐって」（『本願寺展』、朝日新聞社、二〇〇八年）など。

（48）川上貢「江戸時代の東本願寺建築」（『明治造営百年　東本願寺・下』（真宗大谷派本廟維持財団、一九七八年）など。